

第6章 長寿命化の実施計画とコスト試算

第6章 長寿命化の実施計画とコスト試算

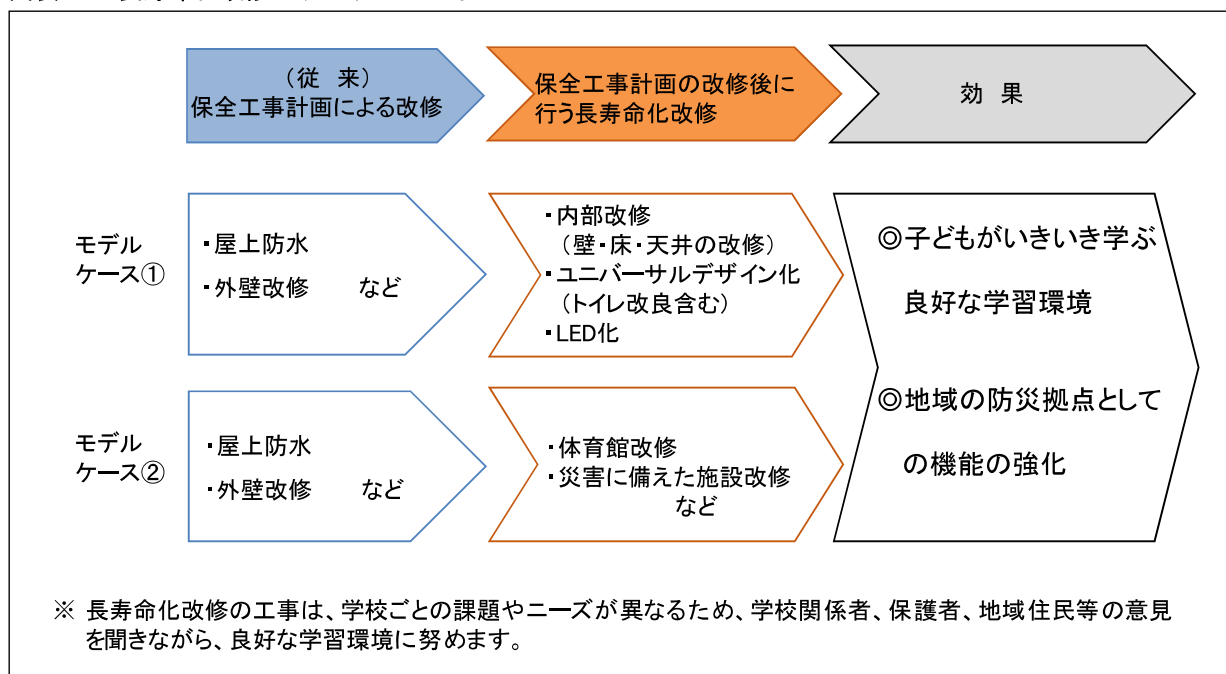
1 長寿命化改修の考え方

長寿命化改修の実施方法の一つとして、改修工事中に仮設校舎を設置し、壁・床などの内装や外壁・窓のサッシなどの外装の改修、水道管やガス管等の更新といった全面的な改修を、1～2年間で短期集中的に実施する方法があります。この方法は、工事の効果を素早く、学校全体で享受することができるというメリットがある一方、仮設校舎の設置に膨大な費用を要するというデメリットがあります。近年の学校改築における実績では、1校あたり4～5億円の費用がかかっています。限られた財源の中で、より多くの学校をより早い時期に長寿命化改修していくために、取壊しが前提の仮設校舎に多額の費用をかけるのではなく、別の方法で長寿命化改修を実施して、子どもたちの教育環境を向上させていかなければなりません。

長寿命化の実施計画の策定にあたっては、一定の条件でシミュレーションを行い、今後長寿命化対策を進めるために必要なコスト（お金）とその成果・進捗状況（スピード）を明らかにしていく必要があります。

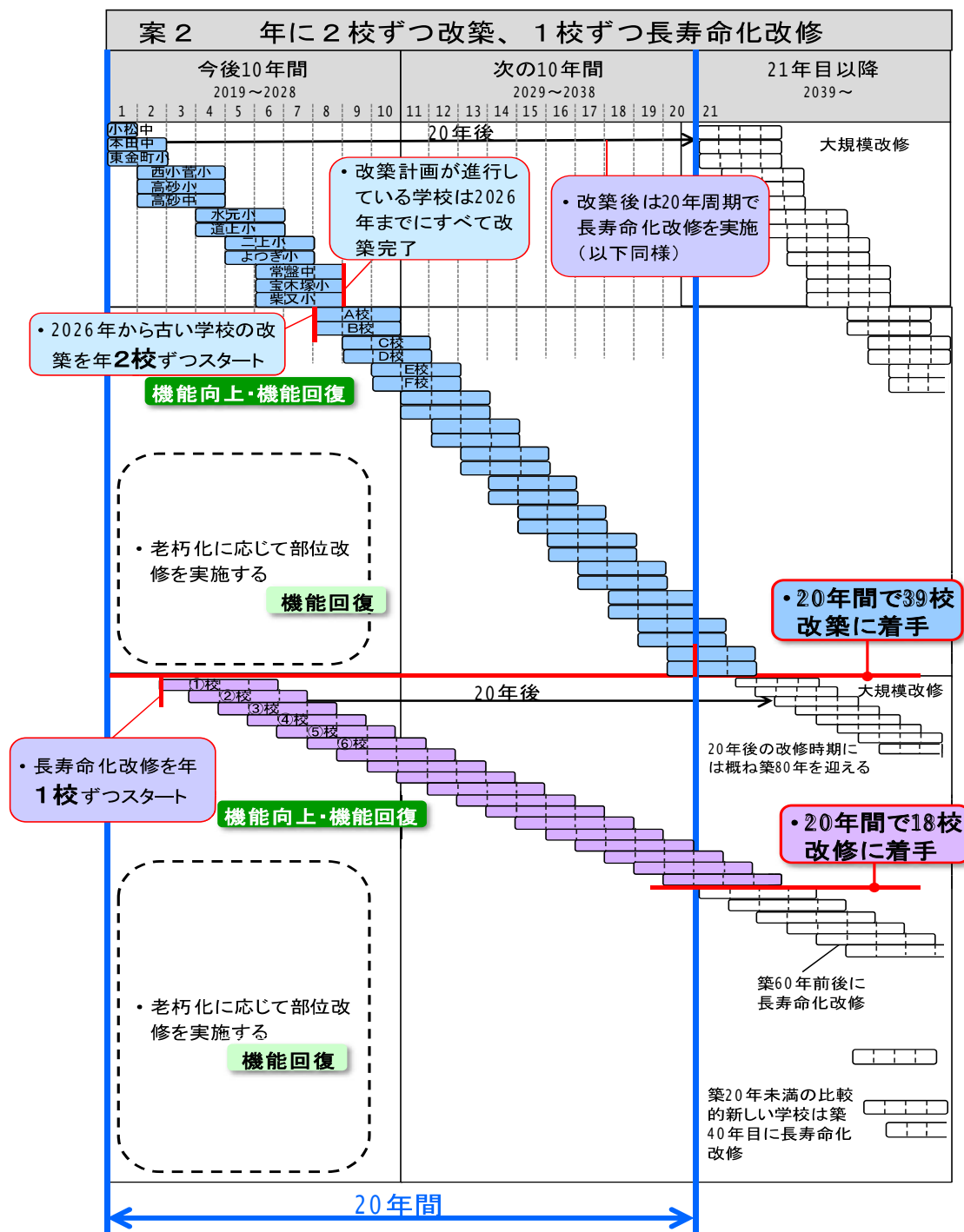
この章では、仮に学校を特定した形で、仮設校舎を設置せずに4年間かけて、1校又は2校に集中的に長寿命化対策を実施した場合のシミュレーションを行い、投入するコストと得られる効果を見ていきます。

図表 29 長寿命化改修モデルケースのイメージ



案2では、改修事業計画・改築計画校の改築完了後から、建築年度の古い学校の改築（建替え）を年2校ずつ進めていきます。さらに20年間で年2校ずつ進めます。20年間で39校の改築に着手します。また、40校目以降を年に1校ずつ長寿命化改修を実施します。20年間で18校の長寿命化改修が着手できます。これにより、20年間で57校の機能向上を図れます。改築（建替え）や改修が11年目以降となる場合は、部位改修を実施し、機能の回復を図り、学校施設の安全と性能を確保します。

図表 31 今後の施設整備の考え方 案2



3 短期計画（10年間）

今後10年間の計画は、平成30（2018）年6月に教育委員会で定めた「改築校選定の考え方」により選定された学校から改築を進め、当面改築に至らない学校から長寿命化改修を実施し、機能向上の図られた良好な学校としていきます。

長寿命化改修は、保全工事計画の部位改修と、内部改修及び機能向上等の工事を併せて合理的・効率的に長寿命化を図ります。

図表32 今後10年間の整備内容（案）

整備内容	
● 改築	既に計画が進行している学校（年1.2校） 案1：年に1校ずつ 案2：年に2校ずつ スタート
● 内部改修・外部建具 ● 学習環境の向上 ● 省エネ化等 ● バリアフリー・ユニバーサルデザイン等 ● 防災・防犯	案1：年に2校ずつ 案2：年に1校ずつ スタート
● 保全工事計画で定める部位の、 積み残しを含め老朽化を改善する ● 施設運営上、緊急性が高い部位の改修	保全工事計画による
● 空調リース等	空調リースの継続（ただし、改築時には 保全工事計画対象）
● 経常修繕	これまでの実績により設定

今後10年間の案1による短期計画のコスト配分は下に示す通りになります。

年ごとの総額は、53.0億円から99.1億円となります。改築は、17.5億円から53.4億円、長寿命化改修は、3.8億円から16.7億円となります。

図表33 今後10年間の短期計画（案）

